

# 明恵における成仏の思想について

## ——『解脱門義』を中心に——

高橋 寿光

### はじめに

明恵上人<sup>①</sup>（以下、諸師の敬称を略す）は晩年、『仏光観法門<sup>②</sup>』を著して仏光三昧観<sup>③</sup>を修しておられた。それを理論的に解説したのが『華嚴修禪觀照人解脱門義<sup>④</sup>』（以下『解脱門義』）などの諸著作である。『解脱門義』では図印によって解脱門能入の義を示している。本稿では、この図印の特徴を確認した上で、『解脱門義』を中心とした仏光観諸著作に示される明恵の成仏の構造や特徴を明らかにすることを目的とする。

### 一 『解脱門義』所説の図印について

『解脱門義』の図印は「文殊毘盧遮那普賢尊」「自性普光明無作大智」「空智慧光明普見法門」「憶念一切諸仏智慧光明法門」「若修行者、求大菩提心者、無勞遠求、但自淨一心。心無即境滅。識散即智明。智自同空。諸縁何立<sup>⑤</sup>」という五つの文句で構成されており、これらは総称して五段と呼ばれている。この五段の文句はすべて李通玄の著作にある文句を引いたものであり、李通玄からの影響のほどが知られる。

五段の文句のうち中央の三行（「文殊毘盧遮那普賢尊」「自性普光明無作大智」「空智慧光明普見法門」）は、人に約すと因果は不同であるが、法に約すと因果の義があり、この因果の義によって一乗十信の法が成ずるとしている。この三行のうち、「自性普光明無作大智」は十信初心、「空智慧光明普見法門」は十信終心を表し、上方の「憶念一切諸仏智慧光明法門」が初発心住を表している<sup>⑦</sup>。そして中央の三行は上方の一段に対する能入の門とされ、これをもって初発心住に至り便成正覺を成ずるとして<sup>⑧</sup>いる。なお、「憶念一切諸仏智慧光明法門」は初発心住を意味すると同時に、その文

句は念仏三昧解脱門の名字を示している<sup>⑨</sup>。中央の三行が「憶念一切諸仏智慧光明法門」の下方に図示されるのは信位に卑劣義、初首義、根本義の三義があることによる<sup>⑩</sup>。対する「憶念一切諸仏智慧光明法門」が上方に図示されるのは、住位高勝の義をあらわすためであるとしている。また、善財童子が徳雲比丘に妙峯山頂で念仏三昧法門を聞いたこと、如来が須弥山山頂で法惠菩薩に念仏三昧法門を説かせたこと、この二事がいずれも山頂でなされたことの象徴として上方に図示されている<sup>⑫</sup>。下方の一行は李通玄の『十明論』によって大菩提心の行者の行法を示している<sup>⑬</sup>。『十明論』ではこの文句の後に「以空智慧光明普見法門入十住初心。此如善財童子登妙峰山頂<sup>⑭</sup>」と続き、行者の行法は心境俱空の境地に達することであることを示しながら、空智慧光明普見法門を以て十住初心に入ること述べている。そしてこの行法過程が、善財童子が初発心住の善知識である徳雲比丘のいる妙峯山に登ることに通じるとしている。なお、この文言が下方に示されていることに関する配置上の意図はない<sup>⑮</sup>。

この五段を「文殊毘盧遮那普賢尊」から一本の線で結び、その関係を四対という四つの関係によって説明している。中央の三尊（文殊毘盧遮那普賢尊）と左方<sup>⑯</sup>（自性普光明無作大智）との関係について、左方の大智は中央の三尊（三法）によって成立（能成）する大智であり、大智は中央に対して所成となる<sup>⑰</sup>。つぎの左方と右方の関係は能生所生対として示される。ここは仏光三昧観の実践によって十信初心から信満に至るところを示している。この能生所生対を成立させる仏光三昧観の実践に関して明恵は次のように述べている。

先須於散位、對善友〔善友義雖多種、以有大智大悲徳、名善友。大智徳、通達諸佛法、大悲徳、對衆生、不貪名利。以大慈悲、憐愍衆生、以大智説如實正法。能所相順、佛道、得開發。悲智體用、互相導。義、如常釋〕、求學權實義理、漸

頓不同、捨權取實、如前說、與三尊法合、可令普光明智、現前於心中。又、如律所說、深離財色二欲。離財欲故、身處閑靜。離色欲故、心清淨。須起深心、受修禪法。於禪法中、有情識都滅方便〔此條就顯密、有種種祕方。更問明師、不能顯露而已。但此云都滅者、不必如滅盡定等。唯用禪門方便、令不生事識分別、觀心凝然、一向照見無生真理。是名都滅也。如彼意言無分別觀等〕。受學此法、後澄心於朗月、覺眠於松風、深修習思惟之時、十重作想〔約此三昧觀、作說。其觀門、如別記說〕。成已至第十重位、自心同虛空、朗然安樂。十方遍觀、都無内外中間〔深義更問〕。方始、了知空慧現前。觀察一切衆生及以國土、皆如幻化。無有體相。空慧自性、皆周遍故、一切諸佛成正覺、轉法輪、三世諸劫、在一時。無時分延促安立之相。如十明論云。

これは『仏光觀法門』所說の一連の仏光三昧觀のことを述べている。行者は善友である文殊から一乘大法を聞くことにより十信の心を起こす。それによつて三尊の法と円融し自性光明無作大智をもつて心中に現前させる。そして心を清浄にして十重に仏光を觀想する。こうして十重に至ると自心が虚空と同じて十方に遍満し中間がなくなるという。このとき空慧、つまり空智慧光明普見法門を了知するのだが、この了知した段階が信満の状態であるというのである。下位の文にある「心無即境滅。識散即智明」はこのことを述べたものであり、これをもつて明恵は「入解脫門」「入仏智見」「念仏三昧」であるとしている。

つぎに十信終心を意味する右方の「空智慧光明普見法門」と上方の「憶念一切諸仏智慧光明法門」は、修行者が十信終心において觀照を起こすときに「空智慧光明普見法門」を方便として「憶念一切諸仏智慧光明法門」に入るという關係から、能入所入対と名付けている。

総別教義対は上方の一行及び中央の三行を合わせた四行と、下方との關係を示したものである。高信の『解脫門義聽集記』第四には「總と云は、図の下の横の一段也。若修行者求大菩提心等文也」。別と云は、上の四段也」と述べられている。上方と中央の四行は一連の修証過程としての構造が示されているのに対し、下方の文は修証過程を総括している。

明恵はこれらの図印の所表について『華嚴一乘法界図』に准じたことを述べている。『華嚴一乘法界図』では七言三十句二百十字を線で結び、四角の中に五十四の角ができるように並べたものである。『華嚴一乘法界図』の図印は「二門分別。一總釋印意。

二別解印相」というように、図印が示す内容を二門に分けて解説し、このうち印相を解する中では、文相を説く、字相を明かす、文意を釈すという三門に分けて解説している。また、『華嚴一乘法界図』ではすべての文句が一道によつて連なっている。これは「表如来一音故。所謂一善巧方便」であるとしている。『華嚴一乘法界図』の図印全体で「欲表釋迦如来教網、所攝三種世間。從海印三昧、槃出現顯故。所謂三種世間、一器世間、二衆生世間、三智正覺世間。智正覺者、佛菩薩也」ということを表しているから、一音教が示す一善巧方便としての行は、海印三昧より表された三種世間自在行であるといえよう。すべての文句が一道でつながれているのは、その修証過程を示しているのである。『華嚴一乘法界図』は修証過程の中で、初発心時便成正覺の義を示すため、『解脫門義』の図印の所表を示す上で、援用しやすかつたものと思われる。

## 二 明恵における成仏論の検討

### 二一 華嚴諸師における信満ないし初発心住成仏について

#### 二一一 智儼の場合

智儼は十信終心における成仏に關し『五十要問答』「十四信満成仏義 賢首品釈」の中で、十地終心成仏をいわずに十信成仏だけをいったのでは三乗教にすぎず、十信成仏から十地終心成仏に至るすべてを具えなければ一乗円教の成仏にならないとしている。一乗円教の立場によれば十信から十地に至るすべての階位で成仏を得ることになるが、十地位を除いてはいずれの階位においてもすべての階位の成仏を具えなければそれは三乗教とみなされる。だからといって十信位が程度の低いものとして見なされていたわけではなく、円通の徳ある階位であるから妙慧によつてでなければ満ずることのできないものと見なされている。

#### 二一二 義湘の場合

義湘は『華嚴一乘法界図』の中で、『六十華嚴』「賢首菩薩品」「梵行品」における初発心菩薩の諸事に関して、十錢の比喻を用いて初発心成仏を主張している。それによると、初発心菩薩の一念の功德が尽くしきれないとする教典の文句について、それ

はまさに一銭が無尽を顯すのと等しいとする。同様に諸位における無量無辺の功德に關しても、二銭以降が一銭同様無尽を顯すようなものであるとしている。そして初発心時に正覺を成ずるということは、行体の上で一銭即十になると主張している。<sup>32)</sup>

## 二――三 法藏の場合

法藏における信滿成仏に關する記述は『五教章』『諸教所詮差別』『義理分齊』『探玄記』<sup>33)</sup>に見られる。法藏は「第十義理分齊」十玄門の第三諸法相即自在門の中で、同体門に約して自らの中に一切を攝し、それがさらに相即相入することで重住無尽となることを述べているが、この無尽がすべて初門の中にあるとしている。その上で、初發心の菩薩の一念の功德が無量にして辺際ないのは一即一切、重重無尽であるからあり、初發心の菩薩が仏であるとされるのは、始を得れば終を得て、終を窮めれば始を窮めるからであるという。このような一連の相即が十信終心作仏得果の信滿成仏であるとしている。<sup>34)</sup>このことは因果の面からも述べれており、法藏は一即一切は因果關係においても通じるものであるから因果は同体であるとする。だから因分可説果分不可説といえども因位を滿ずればおのずと果海の中に没するとしている。この他、「義理分齊」あるいは『探玄記』でも信滿成仏について述べられ、当然想定されうる十住以降の存在意義、終教と同教における信滿成仏の違い、初門に一切を具すならなぜ初信成仏にならないのか、なぜ初發心成仏とせず信滿成仏とするのか、などが問答とをもって述べられている。ここでは煩瑣になるので、信滿成仏とする理由について、信を成ずるという行による成仏であり階位としての成仏ではないからであること、十住以降の諸位は一即一切即一の相即によって理解されている、ということを示すのみにさせて頂きたい。<sup>35)</sup>

## 二――四 澄觀の場合

澄觀については初心の成仏に關して具体的に述べられていないため定かではないが、『三聖円融觀』の中に信に關する解釈を見ることができる。この中で文殊普賢を能信所信の相對とみなし、普賢が所信の法界を表し、文殊が能信の心を表すとしている。だから『仏名經』に一切諸仏はみな文殊によつて發心するとしているのは、信によつて發心することを表しているといい、善財童子が文殊に會つて大心を發したのは信位にあたるとしている。<sup>36)</sup>つまり、『三聖円融觀』にみる澄觀の主張をみるかぎり、

信は修行者の立場から述べたものではないことがわかる。<sup>41)</sup>

## 二――五 李通玄の場合

李通玄は初發心住成仏の立場をとる。『新華嚴經論』<sup>42)</sup>の中で仏果が顯れるのに三種の不同があるとし、そのひとつとして初發心の十住初位仏果を成ずる事を述べている。つまり、仏の法身の体上において十住十廻向十地などの行相を立て、凡俗化生の門として引接する。そしてここにおいての階位と仏とは相即關係となる。この中で上根の人が信を起せば創首である十住初心に仏果を証するものである。この他に『華嚴經合論』<sup>43)</sup>の中でも十住初心において如来智慧家に入ること述べるなど、一貫して初發心住成仏の立場を取っている。

## 二――六 明恵の成仏論

明恵は「初信は皆、文殊の妙慧を以て毘盧の果徳を信ずるが故に、二聖相從して因果同体の信法を成立す。此の信力に依るが故に、終心に即ち仏家に生ずるなり」<sup>44)</sup>、あるいは『華嚴經』に依るに、光明覺品の中に如来、足下輪の中従り百億の光明を放ちて漸漸に周滿して、行者の心を引きて廣大ならしむ。乃至、第十重に虚空法界に同じくして、行者をして信位の終心の中に於いて根本智を開發し、仏智慧家の中に生ぜしむ。是の時に文殊師利、亦た十重に一切処に周遍して、如来の十徳を説きて行者の信心を成ぜしむ。(中略)謂わく、初信の中に於いて、此の仏果の十徳を以て、所信の境と為す。仏光に隨いて信心をして廣大無辺ならしむ。主伴相從して一乘の信法を成立す」というように、信滿成仏の立場を示している。<sup>45)</sup>

このような明恵の信滿成仏の解釈は法藏に依つたものと思われる。そもそも明恵は自身の中で仏光三昧の実践に關する理論を前に立てた上で三昧行を行じていたわけではない。明恵が仏光三昧に關する諸著作を著すきっかけとなつたのは夢の中の瑞相にある。<sup>46)</sup>その備忘録として『仏光觀法門』は著されたのであり、仏光三昧を教學的に裏付けるために『解脱門義』が著されたのである。つまり、『解脱門義』は仏光三昧觀の実践ありきで成立したものである。実践を重視するのであれば信滿成仏を重視するのは当然であり、ここにおいての成仏の価値が智儼のように条件付きのものであつては不都合が生じてしまう。法藏や李通玄がいうような初心即極の義の中で価値づける必要があつたのであり、以降の階位においては古津氏が指摘するように信滿成仏の



内容を構成するものに過ぎない<sup>(48)</sup>のである。とはいえ信満成仏が完成する上での文殊の位置づけは李通玄の理解に準じている。<sup>(49)</sup>むしろ明恵は李通玄の諸著作に影響を受けながら独自の仏光三昧における理論を構築している。独自の理論を構築する上で、李通玄のそれを援用したのでは処理しきれない点について、他の華嚴諸師の理論を援用しているといえよう。この成仏論も李通玄のそれでは処理できなかったもののひとつである。このように基本的に明恵は信満成仏を述べてはいるが、その先に初発心住成仏を立てる。ただし、それは心住一対の入門として理解されている。<sup>(50)</sup>このような信住の關係として心境合して無二であるとする明恵の考え方は、信満成仏即初發心住成仏を意味し、因位果位の視点の違いによって信満成仏（菩薩）、あるいは初發心成仏（仏）とされるのではなからうか。<sup>(51)</sup>

## まとめ

『解脱門義』の図印は上方の「憶念一切諸仏智慧光明法門」に初發心住を、右方の「空智慧光明普見法門」に十信終心を当て、解脱門の修証過程を示している。そこには初發心住成仏と信満成仏の双方が成立している。しかしこれは、因位果位の視点の違いによって信満成仏（菩薩）、あるいは初發心成仏（仏）とされているものであり、法藏の信満成仏を援用しながらも信満成仏即初發心住成仏という独自の主張をしていると思われる。初發心住成仏については諸師の主張するところであるが、基本的には李通玄に依ったものと思われる。

## 註

- (1) 承安三年（一一七三）—貞永元年（一一三三）
- (2) 『仏光観法門』は承久二年（一二二〇）七月二十五日に著された。これは十信位における仏光三昧観の次第、作法を簡潔に示したもので、入堂坐禪に始まり、禮仏、敬白、観行、出観など、一連の流れと作法が示されている。仏光三昧観に関する著作はこの他に今回取り上げる『解脱門義』承久二年（一二二〇）九月三十日、『華嚴信種義』承久三年（一二二二）九月二十一日、『華嚴仏光三昧観秘宝藏』承久三年（一二二二）十一月九日、『華嚴仏光三昧観冥感伝』撰述年代不

詳だがおそらく『秘宝藏』と同時期、以上の五著作がある

- (3) 明恵上人は、実践重視の姿勢の中で李通玄の『華嚴經合論』『華嚴經決疑論』『解迷顕智成非十明論』などの諸著作に出会い、仏光三昧観を修するようになった。これは明恵が四十八歳の時のことで、管見の限り五十五歳まで仏光観に関する講義をしていたという記録があることから、明恵が修した行の中でも最晩年かけて行われたものであることが知られる。

- (4) 承久二年（一二二二）九月撰述。

- (5) 若し修行者、大菩提心を求めるならば、遠求を勞するこ無く、但だ自ら一心を淨むべし。心無ければ即ち境滅せん。識散ずれば即すなわち智明らかなり。智は自ずから空に同ず。諸縁を何ぞ立つ」

- (6) 「文殊毘盧遮那普賢尊」は『華嚴決疑論』（『正藏』三六、一〇一四a）、「自性普光明無作大智」は『華嚴決疑論』（『正藏』三六、一〇一二a）、「空智慧光明普見法門」は『十明論』（『正藏』四五、七六八c）、「憶念一切諸仏智慧光明法門」は『十明論』（『正藏』四五、七七一a）および『華嚴經合論』（『統藏』六、九一三a）、「若修行者、求大菩提心者、無勞遠求、但自淨一心。心無即境滅。識散即智明。智自同空。諸縁何立」は『十明論』（『正藏』四五、七六八c）からの引用である。

- (7) 約一乗教、中央三行、約人雖因果不同、約法以此因果義、成一乘十信法故、即以此空智慧門、爲十信終心。以諸佛境界智慧門、爲初發心住」（『正藏』七二、七八a）

- (8) 即以此中央三段、皆爲能入門、入上方發心住。即初發心時、便成正覺義也」（『正藏』七二、七八a）

- (9) 上方一行即初發心住、念佛三昧解脱門名字也」（『正藏』七二、七八a）

- (10) 『探玄記』には「足下相輪放光者、有三意。一初義、表信爲萬行首故。二卑義、表信行最微故。三本義、表信爲萬行之本故」（『正藏』三五、一七二b）とある。

- (11) 下三段信位故、表卑劣義故、表初首義故、表根本義故、在下方也」（『正藏』七二、七八b）

- (12) 善財童子、至德雲比丘處、比丘、於妙峰山頂、説此三昧法門。又如來、於須彌山頂、加法慧菩薩、令説此法門。表住位高勝義故也。今依表山頂、安上方也」（『正藏』七二、七八b）

- (13) 「爲大菩提心行者、明示行法文也」（『正藏』七二、七八b）

(14)「空智慧光明普見法門を以て十住初心に入る。此れ如善財童子の妙峰山頂に登るが如し」(『正藏』四五、七六八c)

(15)中央三行下横一段文、無別所表(『正藏』七二、七八b)

(16)「文殊毘盧遮那普賢尊」と「自性普光明無作大智」の關係を能成所成対、「自性普光明無作大智」と「空智慧光明普見法門」の關係を能生所生対、「空智慧光明普見法門」と「憶念一切諸佛智慧光明法門」の關係を能入所入対、「文殊毘盧遮那普賢尊」から「憶念一切諸佛智慧光明法門」までと「若修行者…」の關係を総別教義対とする。

(17)本文中では中央の三尊から左右をみるので、図で見たときの左右とは表記が逆になる。本稿中では便宜上図で見たときの左右をいうことにする。

(18)「第一能成所成対者、於中有二重。先中央三尊、擧能成三尊、取所成三法。即擧人取法也。即爲人法一對。然不別開法也。次右方一行、依能成三法、所成立大智也。此又對中央爲能成所成対。可知。次能生所生對者、右方一行、對中央爲所成(第一に能成所成対とは、中に於いて二重有り。先ず中央の三尊は能成の三尊を擧げて所成の三法を取る。即ち人を擧げて法を取るなり。即ち人法一對と爲す。然るに別に法を開かざるなり。次に右方の一行は能成の三法に依りて成立する所の大智なり。此れ又た中央に対して能成所成対と爲す。知るべし。次に能生所生対とは、右方の一行は中央に対して所成と爲す」(『正藏』七二、七八a)。能成所成対は左方との關係を示すと同じに、中央の三尊自体においても能成所成の關係があることを示している。

(19)「先ず須く散位に於いて善友に対して〔善友の義、多種なりと雖も、大智大悲の徳有るを以て善友と名づく。大智の徳は諸仏の正法を通達し、大悲の徳は衆生に対して、名利を貪ぜず。大慈悲を以て衆生を憐愍し、大智を以て如実の正法を説く。能所相順して、仏道開發することを得。悲智の体用、互いに相導す。義常に釈するが如し〕権実の義理、漸頓の不同を求学して、権を捨て実を取りて前に説けるが如く、三尊の法と合して普光明智をして心中に現前せしむべし。又た律所説の如く、深く財色を離るるが故に、心清淨なり。須く深心を起こして、修禪の法を受くべし。禪法の中に於いて、情識都滅の方便有り〔此の條顯密に就きて、種種の秘方有り。更に明師に問へども、顯露にすること能わざるのみ。但し此に都滅と云うは、必ずしも滅尽定等の如くならず。唯禪門の方便を用いて、

事識の分別を生ぜざらしめば、觀心凝然として一向に無生の真理を照見す。是れを都滅と名づくるなり。彼の意言無分別觀等の如し〕。此の法を受學して、後に心を朗月に澄まし、眼りを松風に覺まして、深く修習思惟するの時、十重に作想す〔此の三昧觀に約して説を作す。其の觀門、別記に説くが如し〕。成じ已りて第十重の位に至るに、自心虚空に同じくして朗然安樂なり。十方に遍觀して都て内外中間無し(深義更に問へ)。方に始めて空惠現前することを了知す。一切衆生、及び国土を觀察するに、皆な幻化の如し。体相有ること無し。空惠の自性、皆な周遍するが故に一切諸仏の成正覺、轉法輪、三世諸劫、一時に在り。時分延促安立の相無し。十明論に云へるが如し」(『正藏』七二、八一c)

(20)『正藏』七二、八一c

(21)「今此空智慧光明普見法門者、修行者於定位起觀照時、以此門爲方便、入憶念一切諸佛境界智慧光明普見法門」(『正藏』七二、八一b)

(22)「次能入所入對者、左方一行、對右方爲所生。對上方爲能入。上方即對左方爲所入」(『正藏』七二、七八a)

(23)『金沢文庫研究紀要』四号、七二

(24)『正藏』四五、七一一a

(25)『正藏』四五、七一一b

(26)「三種世間」について智儼『華嚴孔目章』(『正藏』四五、五六八c)には「三世間者。於淨佛國土中。有三種自在行。一器世間自在行。二衆生世間自在行。三智正覺世間自在行。器世間自在行者。有五種自在。一隨心所欲。彼能現及不現。二隨何欲彼能現。三隨時欲彼即時現。四隨闊狹欲彼能現。五隨心幾許欲彼能現。名器世間自在。云何衆生世間自在行。是菩薩隨衆生差別信。隨決定信差別。彼彼佛國土中。彼彼大會中。如是如是自身示現。是菩薩。若於沙門衆中。示沙門形色。如是等彼彼國土中。如是自身差別示現。云何智正覺自在行。第一義諦智世諦智等。經曰。是菩薩遠離一切身相分別。得身平等。是菩薩知衆生身。知國土身。知業報身。知聲聞身。知辟支佛身。知菩薩身。知如來身。知智身。知法身。知虚空身。是菩薩。如是知衆生深心起信樂。若以衆生身作自身。或以自身作衆生身。如是等九身如是。是菩薩。如是知衆生深心起信樂。展轉自在成。廣如地論説」とある。

(27)「釈迦如來の教網を表さんと欲す。所謂三種世間なり。海印三昧從り榮出現顯するが故に。所謂三種世間とは、一つには器世間、二つには衆生世間、三つには智

正覚世間なり。智正覚世間とは、仏菩薩なり」『正蔵』四五、七一a

- (28) 柴崎照和氏は明恵の『解脱門義』における成仏義を考察するなかで、その構造から「二段階成仏論」と便宜上名付けておられる。『明恵上人の研究』三三二)

- (29) 問、十信作佛、與十地終心作佛、差別云何。答、若但言十信作佛、不論十地終心作佛、則是三乘教。何以故。由法義道理不具故。若具五位及九位作佛、即是一乘圓教攝也。何以故。由具教義等、具足說故。小乘佛、三乘佛、並是阿含佛、一乘佛是義佛也」(『正蔵』四五、五二a)

- (30) 第五、約一乘義者、十信終心、乃至十解位十行十迴向十地佛地、一切皆成佛。又在第十地、亦別成佛。如法寶周羅善知識中說。何以故。一乘之義、爲引三乘及小乘等、同於下位及下身中、得成佛故。又於八地已上、即成其佛。如於此位成無礙佛一切身故。此據別教言。若據同教說、即攝前四乘所明道理。一切皆是一乘之義」(『正蔵』四五、五六a)

- (31) 『搜玄記』に「十信位中圓通之德非妙慧不受。深義淨德唯賢始得」(『正蔵』三五、三二a)とある。

- (32) 經云、初發心菩薩、一念功德、不可盡者、如第一錢。何以故。約一門顯無盡故。何況無量無邊諸地功德者、如第二錢已去。何以故。約異門說故。初發心時便成正覺者、如一錢即十故。何以故。約行體說故」(『正蔵』四五、七一上)。ここであるところの「經云」とは『六十華嚴』「賢首菩薩品」の「菩薩於生死、最初發心時、一向求菩提、堅固不可動。彼一念功德、深廣無邊際。如來分別說、窮劫猶不盡。何況於無量無數無邊劫、具足修諸度諸地功德行」(『正蔵』九、四三二c)および同「梵行品」の「初發心時、便成正覺。知一切法真實之性、具足慧身、不由他悟」(『正蔵』九、四四九c)からの趣意および引用である。

- (33) 『正蔵』四五、四八九b

- (34) 『正蔵』四五、五〇五a

- (35) 『正蔵』三五、一〇八c、一一七a

- (36) 『五教章』には以下のようにある。「三者諸法相即自在門。此上諸義一即一切。一切即一。圓融自在無礙成耳。若約同體門中。即自具足攝一切法也。然此自一切復自相入。重重無盡故也。然此無盡皆悉在初門中也。故此經云。初發心菩薩。一念之切德。深廣無邊際。如來分別說。窮劫不能盡。何況於無邊無數無量劫。具足修諸度諸地功德行。義言一念即深廣無邊者。良由緣起法界一即一切故爾。如彼同體

門中一錢即得重重無盡義者。即其事也。何況無邊劫者。即餘一一門中。各現無盡義者是也。所以爾者。此經又云。初發心菩薩。即是佛故也。由是緣起妙理始終皆齊。得始即得終。窮終方原始。如上同時具足故得然也。又云。在於一地普攝一切諸地功德也。是故得一即得一切。又云。知一即多多即一故也。十信終心即作佛者即其事也」(『正蔵』四五、五〇五a)

- (37) 問義既不同。何故一種同是信滿勝進分上起此用耶。答爲欲方便顯此一乘信滿成佛令易信受故。於彼教先作此說」(『正蔵』四五、四九〇a)。信滿成佛であることの証左としてはそれが顯著に表れているところのひとつである。

- (38) 問、若爾云何說得諸位階降次第。答、以此經中、安立諸位、有二善巧。一約相就門、分位前後。寄同三乘。引彼方便、是同教也。二約體、就法前後相入。圓融自在、異彼三乘。是別教也。但以不移門、而恒相即不壞即、而恒前後。是故二義融通、不相違也」(『正蔵』四五、四九〇a)。「問、若爾應言住位成佛。何名信滿。答、由信成故。是故是行佛、非位佛也。餘義準之」(『正蔵』四五、四九〇b)。これらの詳細な検討については吉津宜英氏(『華嚴一乘思想の研究』)によつてなされている。いまは氏の研究結果に依る。

- (39) あくまで憶測にすぎないが、單純に「成仏」ということで見れば、澄觀の場合はむしろ見性成仏の方に興味があつたため、信位における成仏はあまり語られなかつたのではないだろうか。

- (40) 「一以能信所信相對。謂普賢表所信之法界。即在纏如來藏故。理趣般若云、一切衆生、皆如來藏。普賢菩薩自體遍故。初會即入如來藏身三昧者、意在此也。文殊表能信之心。佛名經云、一切諸佛、皆因文殊、而發心者、表依信發故。善財始見發大心者、當信位故。經云、文殊菩薩、出生一切菩薩、無休息故」(『正蔵』四五、六七一a)

- (41) 吉津宜英氏は、澄觀と法蔵の理解を比較して「法蔵は機根論の所で受教者の心に即して信滿成仏を示したが、澄觀は三聖円融の立場から文殊に託して、いわば教受者の信を示す。法蔵があくまで因門の信に徹していたとすれば、澄觀は果門の立場の信を提示」していると論じておられる。(『華嚴一乘思想の研究』四〇一)

- (42) 『正蔵』三六、七四〇a

- (43) 仏名号品「然後、以無作方便定、印之。入十住初心、生如來智慧家。爲如來智慧法王之眞子」(『統蔵』六、七b)

- (44) 『正蔵』七二、七六c

- (45)『正蔵』七二、七四c
- (46)明恵の『華嚴仏光三昧観冥観伝』には次のようにある。「同（承久二年・一二三〇）七月二十九日、於佛前、致誠請求。於佛前忽睡眠。即夢云、有如來朱雀門樓門。從往昔以來、諸人都不通。然有一大人。召一人童子、仰云、須開此大門、令諸人往來。云々。童子承勅、開此大門。即心思。往昔以來、人不通。從今日以後、諸人輒可往來。云々。即案蒙許可也。大門者即此三昧解脫門。依之予、永以此三昧観、為所作」（『日蔵』華嚴宗章疏七四、一一〇b）。
- (47)明恵は『解脫門義』の中で法蔵『五教章』と李通玄『新華嚴経論』の説を引用し、信位の重要性を指摘している。（『正蔵』七二、七六b）
- (48)このことは吉津氏が法蔵の信満成仏成立以降の階位の存在意義を論じる中で述べられている。（『華嚴一乗思想の研究』三八七）
- (49)これに関しては李通玄『新華嚴経論』などの主伴相従に依っているところが大きい（『正蔵』三六、一〇四六b）。
- (50)明恵は上方の一行を解説する中「謂此十住法門、信位菩薩、初於普光明智中、起因果同體信。次於定位、正起空智慧観。於此觀智中、深入佛知見。始與法身合不見萬法。能所無二也。向果位（佛果也）名憶念諸佛智慧門。向因位（信位也）名空智慧光明門。心（信位也）境（十住也）合能（信位也）所（十住也）無二故、無初（信位也）後（十住也）不同。初發心時、便成正覺。不論相好及與神通。一切一乘甚深行門方便雖不同皆此門建立也」（『正蔵』七七、八三a）と述べている。
- (51)柴崎氏は明恵の心住一対の主張に関して「実践的な成仏論である信満成仏と、理論的な成仏論である初發心住成仏（初發心時便成正覺）との齟齬を融和しようとする考えによるもの」（前掲三七四）としておられる。